

二〇二一年度B

国語 (60分)

〈注意〉

- (一) 開始のチャイムが鳴るまで、この冊子を開いてはいけません。
- (二) 問題は1ページから29ページに印刷されています。
- (三) 受験番号と氏名は解答用紙の定められたところに記入しなさい。
- (四) 解答はすべて解答用紙の定められたところに記入しなさい。

受験番号			

I

次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

1

「おい、秋永^{あきなが}、ちょっとこい」

昼休みに教室でクラスメイトの入間君^{いるまくん}に呼び止められたとき、僕は無抵抗^{むていこう}にしたがった。いつかこういう日が来るだろうと予測していた。入間君はいわゆる不良だ。髪は黄色^{かみ}に染めている。制服からは煙草^{たばこ}の臭い^{にお}がする。逆らってはいけない人物だ。

何をされるのかとおびえながら入間君についていく。教室を出るとき、話したこともないクラスメイトたちが、あわれみの視線をちらりとむけてきた。入間君はポケットに両手をつつこんで、だるそうにあるきながら言った。

「おまえちよっとパン買ってこい。なんでもいいからよ。体育館の裏にいつから。五分以内だぞ。おくれたらぶつ殺すからな」

これは、つまり、使いつ走りをやれという意味だろうか。いわゆるパシリ。強者が弱者に対して、^(a)半ば強制的にお使いをやらせるといふ類いのパワーハラスメントだ。僕はそれを申しつけられたのだ。

パンは購買^{こうばい}で売っている。教室と購買、そして体育館裏の位置関係を頭に描^{えが}いてみた。購買だけ離れた位置にある。だれかをパシラせたくなる気持ちはすこしわかった。

「さっさと行けよグズ」

入間君は虫けらを見るような目で僕を見る。威圧感^{いあつ}に身がすくんだ。^①ともかく僕は購買にむかつて走り出した。五分以内という時間制限を守るには全力疾走^{しつそ}しなくてはならなかった。

目をつけられたのは、気弱そうな雰囲気^{ふんいき}が原因だろうか。僕は体がちいさい。高校生の集団にまじっていると、まわりは背の高い人たちばかりなので、いつも心細い気持ちになってしまう。何かに秀^{ひい}でていれば、自信につながって、堂々^{どうどう}としていられるのだから。

う。だけど僕には、人にほこれるものがない。② 教室で息を殺すようにしながら暮らしている。

体育の授業以外で走ったことなんかない。すぐに息があがってしまう。脇腹が痛くなり、廊下の壁に手をついてよろめきながら移動する。階段をおりて校舎一階の奥まった位置にむかう。自販機の並んでいるスペースがあり、そのとなりに購買の入り口がある。ガラス製の引き戸だ。

購買はちいさめのコンビニエンスストアをおもわせる空間だった。棚に文房具やお菓子が陳列されている。お昼時には弁当やサンドイッチ、おにぎりの類いが山盛り用意された。食堂を利用せず、弁当持参でもない生徒は、ここで昼食を購入するのが一般的だ。入間君はパンを買ってこいと言った。さて、どれを買おう。パン売り場で頭をなやませる。なんでもいいからよ、などと彼は言ったが、むしろ商品を限定してほしかった。

購買のパンには二種類あった。ひとつはコンビニエンスストアで売られているような商品。工場でセイゾウされ、透明な袋でしっかりとパッケージされている。もうひとつは高校の提携している業者がつくったパン。こちらはコッペパンに焼きそばや玉子サラダなどをはさみ、ラップでホウソウがされている。

はたしてどれが正解だろう？ 入間君の顔をおもいだし、クロッケパンを手取る。④ ホケンとしてメロンパンも買うことにした。ついでに飲み物もあったほうがいいだろう。買ってこいとは言われていないが念のためだ。

レジでセイサンして体育館裏へとむかう。息も絶え絶えに体育館をぐるりとまわりこむ。普段なら生徒の立ち入らないような場所に入間君がいた。おそろしい顔つきの先輩方といっしょに中腰になって喫煙している。おそろおそろちかづく会話がぴたりとやんで、③ ねめつけるような視線がむけられた。みんなまるで人殺しみたいな目だ。

「あのう、これ……」

萎縮しながらパンと飲み物の入った袋をさしだす。入間君は袋の中を確認すると、つまらなそうにポケットから五百円玉を出して僕にほうりなげた。地面にころがった硬貨を回収する。購入代金よりもおおかったので、財布からお釣りを出そうとしたら入間君が

言った。

「いらねえ、もうどっか行け」

しっしっ、と手をうごかす。しかし翌日も、その翌日も、僕は人間君に呼び止められ、パンを買いに行かされることになる。

2

「秋永、パン、買ってこい」

人間君の命令はいつもそれだけだ。購買には、からあげ弁当やシーチキンおにぎりも売っているのに、いつもパンだ。買ってきただけのパンでありさえすれば、それでいいらしい。クリームパンだったとしても、チョココロネだったとしても、僕は無事に解放された。

奇妙なことだが、^④悔しいとはおもわなかった。むしろここで自分の有用性を見せつけることで、暴力の対象から除外されるのではないかという **A** がはたらいた。腰巾着になることでいじめられないようにする作戦だ。購買まで全力疾走^{しつそ}しなくてはならなかったが、それも苦ではなくなった。毎日つづけていたせいだろう。教室から購買までの距離^{きょり}を一度も休まず、スピードを落とすことなく、移動できるようになった。僕はそのことにおどろく。運動能力というものは持つて生まれたものだとおもいこんでいたのだが、そうではなかったらしい。

廊下^{ろうか}を駆け抜^ぬけて、階段を飛ばし気味におりる。曲がり角をきゅつと曲がり、生徒たちの間をすり抜^ぬける。以前よりも足がスムーズにうごいた。体が軽い。反復することにより走る力というのは向上するのもかもしれない。

彼はいつも五百円を放り投げてくる。だからその金額の範囲^{はんい}でパンと飲み物を **B** しなくてはならない。購入代金が五百円

よりもおかったとしても、請求^{せいきう}はしなかった。おつりを渡^{わた}していなかったので、その分と **C** だろう。

購買のパンと飲み物の金額をすべておぼえてしまった。どの組みあわせで五百円前後になるのかが一瞬で判断できる。しかしそれはかんたんなことだ。真にむずかしく、パシリのセンスが問われるのは、「今日はどのパンを買うのが正解なのか？」という命題に他ならない。

パンでありさえすればいい。入間君を見ると、そうおもえてくる。しかしそれで良いのだろうか。すくなくとも僕だったら、毎日、おなじパンでは飽きてしまう。

氣を利かせて一日ごとに異なる種類のパンを買った。育ち盛りなので一個で満腹になるということはないはずだ。複数個、購入する。甘い菓子パンばかりに偏ることなく、総菜パンばかりに偏ることなく、栄養のバランスも考慮しながらパシる。

だが、それさえも最適解ではない。僕はリサーチをおこなった。だが、どんなパンを買って行くのかを研究しはじめる。有用性を見せつけたかった。購買のパンの棚が見える位置に陣取って人々を観察する。やがて意外な事実が判明した。おおくの生徒が、前日とおなじ商品を手にとっていたのだ。一週間、毎日、カレーパンばかりを買っていった生徒もいる。人には人の、好きなパンがある。毎日、いつも、それだけを食べていたものなのだ。そのことに気付かされる。もしかしたら入間君もおなじように感じているのかもしれない。特定の商品ばかりをいつも買ってきてほしかったりするのだろうか。

そこで僕は、彼がパンをほおばる様子を遠くから観察することにした。パシりをすませた後、帰るふりをして草むらにひそみ、双眼鏡をかまえて体育館裏に目をむける。入間君が不良の先輩方と話をしながらパンを開封し、食べ終えるまでの時間を計測し、表情の変化をメモした。パンの好みをしりたかったのだ。菓子パンと総菜パン、どちらを食べるときに表情がやわらかくなるだろう。

「おい秋永、おまえ何してんだ、ぶつ殺すぞ」

しかしある日、草むらにひそんでいるところを入間君に見つかってしまった。

「見てたんだ、入間君を……。つまり、その、パンの好みをしろうと思つて……」

しどろもどろになりながら弁解した。理由を説明していると、気持ち悪そうな顔をされる。いつもみたいに、しっしつ、と手で追

いはらわれた。

「今回はゆるしてやる。もうどっか行け」

「ちょっと待って！ あの、おしえてほしいんだ！ パンの好みを！ どんなパンを買ってきてほしいのかを！」

地面に膝^{ひざ}をついて僕は問いかける。入間君は舌打ちすると、背中をむけて言った。

「パンなら、なんでもいい。だが、そうだな。しいて言うなら、焼きたてにまさるものはない」

焼きたて？ 想像もしていない回答だった。しかし言われてみればたしかにその通りだ。焼きたてのパンのおいしさは格別だ。でも、どうしろと言うのだ。購買で売られているパンはどれも作られて時間が経過している。彼はわざと不可能なことを言って僕を絶望させているのにちがいない。くそっ！ くやしくなつて拳^{こぶし}を地面にたたきつけた。⑤しかし僕の胸に、ふつふつと闘志^{どうし}がわき上がる。

3

体がちいさいため小中学校では、からかいの対象になることが多かった。クラスの中心にいるのはいつも、サッカー部やバスケットボール部や野球部などの運動ができる奴^{やつ}らだ。機敏^{きびん}にうごくことができて、足のはやい人たちのことを、うらやましいとおもったことはない。彼らは別次元の存在で、自分とは種族が異なるのだ。彼らは僕のことを、自分よりも劣^{わと}った人間だと見なしており、言動からそのことが伝わってきたけれど、事実なのだから仕方ないとおもいこんでいた。そんな僕がジョギングをはじめて体力作りをするようになったのだから⑥人生というものはわからない。

学校から帰宅するとトレーニングウェアに着替^{きが}えた。夕日で赤色に染まる土手を、くたくたになるまで走った。その時間、犬の散歩をしている人がたくさんいる。遠くの鉄橋を電車が通過する。空が広がって心地^{こころ}いい。

ジョギングをはじめたのには理由がある。駅前においしいと評判のパン屋があった。特に焼きたてパンは格別だ。

D それ

をパシってることができれば、

E

入間君を満足させることだろう。問題は学校から店までの距離だ。五分間ではもどつて

これらない。二十分はひつようだ。自転車をつかつてはどうだろう。いや、学校と店の間に急な斜面があり、階段になっている箇所がある。徒歩移動であれば階段を通過できるが、自転車であれば遠回りしなくてはならない。

走るのが一番いい。行き帰りに二十分かかる距離を、走り込みによって、できるだけ短縮するのだ。すこしでも早く、行って、もどってくる。

F

オーバーしてしまう時間は秘策をつかうしかない。午前中最後の授業を、腹痛を装って早めに退席するのだ。トイレに行くふりをしながら、そのまま校舎を出て駅前にむかう。

学校帰りに地図をながめながら、校舎から店までの道のりがあるいてみた。どの道を行くのが最短経路だろうか。頭をなやませながら何度も行き来をする。駅前で焼きたてパンを入手する作戦については、入間君にも情報をもらさなかった。準備が整うまでは、それまで通りに購買でパンを買う。しかし走り込みの成果は確実にあった。

「秋永、パン、買ってこい」

教室で命令を受けて僕は飛び出す。購買でパンを購入し、体育館の裏手にむかう。しかし到着してもまだ入間君はいなかった。一分後によりやく彼は現れる。僕の足が速くなり、ルートの最適化がおこなわれた結果、

G

入間君を追い抜いてしまったのである。

「はえーな」

入間君は言った。黄色にそめた頭をかきながら、いまいましそうに唾を吐く。

「全盛期の俺ほどじゃねえけどな」

クラスメイトの噂話によると、彼は中学時代、陸上部だったらしい。県大会にも出場したほどの実力だ。しかし怪我をして走ることをあきらめ、髪の色を染めて不良になった。素行のわるくなった彼の周囲から友人たちは離れていったという。怪我をしていなか

つたら今も陸上を続けていたのだろうか。ジョギングの最中に見た、夕日の土手や、遠くの陸橋に行く電車をおもいだしながら、以前は彼も、そういう景色と空の色を見ていたのだろうかとかんがえる。^⑦彼にとつてのうしなわれた光景を、今は僕が見ているのかもしれない。

「おい、秋永、ちょっとこい」

放課後、廊下^{ろうか}で僕を呼び止めたのは、入間君ではなかった。担任教師が手招きしている。職員室で担任教師と話をすることになった。

「最近、おまえがいじめを受けているという話があるんだ」

「いじめはありませんよ、だいじょうぶです」

「正直に言っているんだぞ。こわがらなくてもいい。入間がおまえに、使いつ走りを強要しているところ、みんなが見てるんだ」

「ちょっとしたお願いをされてるだけです」

「強がりを言うな。秋永、つらいときは、だれかに助けを求めたっていいんだぞ」

「だいじょうぶですから」

教師には僕が、心を開こうとしない生徒に見えただろう。^⑧やがてあきらめたように担任教師はため息をついて僕は解放される。しかし僕の知らないところで、この案件は見過^みごすことのできないものとして扱^{あつか}われていたようだ。

昼休みに入間君が僕を素通り^{すどお}するようになった。僕は彼を呼び止める。

「あの、パンは……？　パンを買ってこなくても、いいのかい……？」

「うっせえ。もう話しかけてくんな」

舌打ちして入間君はさっさと行ってしまう。その後、耳にした噂うわさによると、教師が入間君に忠告しに行ったらしい。使いつ走りの強要がおこなわれた場合、あるいはそう疑われる行為こういが目撃もくげきされた場合、嚴重に罰ばつすると。

入間君はもうだれかにパシリをやらせるつもりがないようだ。僕はもう購買こうばいまで全力疾走しきそうするひつようなく、以前とおなじように平穩へいおんにすごすことができるのだ。グループをつくってお弁当を食べているクラスメイトを横目で見ながら、僕はひとり、机にはおづえをついて昼休みをすごすようになった。

足が落ちつかなかった。パシリの日々ひびのせいだ。僕の足はこの時間になると、勝手にうごきだそうとする。^⑨何日か平穩な昼休みを過ごした後、辛抱しんぼうできなくなつて体育館裏へむかった。

時計を確認かくにんする。昼休みはのこり十分ほどだ。体育館裏手に入間君と不良の先輩せんぱいたちがいた。入間君はゼリー飲料の銀色のバックをくわえている。彼かれにむかつて話しかける。

「今からちよっと、パン、買ってくるけど」

「失せろ」

「僕が買うんだ。僕が自分の分を。だけでもよかったら、それをわけてあげてもいい。焼きたてのパンをね」

入間君は僕にむかつてゼリー飲料のバックを投げつけようとしていたが、話を最後まで聞いて、うごきをとめた。僕は彼に背中を見せて、走り出した。以前から計画していたことを、僕はその日、実行に移したのだ。昼休みがのこり十分ほどしかないというのに。無謀むぼうなのはわかつていたけれど。

校門をダッシュで通過する。ランニングシューズのグリップ力は上々うじょうじょうじだ。走るようになって靴くつを買かい換かえた。軽量タイプのものだからゴムの厚みはそれほどではない。衝撃しょうげきの吸収力も期待できない。そのかわり、まるで裸足はだしのようだ。

アスファルトの地面を蹴る。曲がり角を、ぎゅん、と曲がった。スタート直後は苦しかった呼吸も、しばらくすると楽になる。筋肉が眠りから覚めた。体が軽くなったような気がする。

前方、横断歩道の信号が赤だ。車が行き交っている。道路沿いに進んで別の横断歩道を渡るルートに変更した。状況に応じて最適な経路を選択する。自転車さえ通れない塀と塀の隙間を通り抜けてショートカットする。公園の茂みをジャンプで飛びこえ、階段を駆け上がる。

駅前がちかくなってきた。多少の遠回りになったが、通行人のすくない路地を選ぶ。違法に駐輪された自転車を飛びこえた。

走る、走る、走る。やがて、パン屋の看板が視界に入った。到着して店内に入る。深呼吸すると香ばしいパンのおいがした。お昼休み中のOLさんが何人かいた。高校の校舎とは異質の空間だ。放課後にリサーチをかねて店に足をはこんでいたので怖い気づきはしない。流れるような動作でトレイをつかんで焼きたてのパンを載せる。この時間に焼きあがるパンの種類も頭に入っている。それらを一個ずつ購入する。レジでお金を支払う間に時間を確認。すでに昼休みがおわろうとしていた。

袋に入れた焼きたてパンは、あたたかかった。胸に抱いてはしると、ほかほかとした熱がつつたわってくる。地面を踏みしめ、筋肉をふりしぼり、体を前へと押し出す。前へ、前へ。空気の壁に突入。空気は風となつて肌の表面をなでる。前方にあった景色は後方へと過ぎ去り、また新しい景色が僕のむかう先から現れる。訓練のおかげで足がうごいた。^⑩ 脳が命令を発するまでもなく、まるで足が自由意志を持ったように。このままスピードをあげれば空に飛んでいけるかもしれないとさえ感じられるほどに。

パシリの強要はいけないことだ。それはまちがいない。人間君がどのような理由で僕を購買に走らせたのかわからないが。だけど、感謝でもある。僕にはきっかけがひとつあったのかもしれない。それがなければ、一生、しらなかつたかもしれない。反復によって体がスムーズにうごくようになるということ。昨日よりも今日、今日よりも明日、すこしずつ成長できるということ。その機会がだれにでもひとしくあたえられているのだということ。僕は教室でうつむいて過ごさなくても良かったのだということ。を。体つきや生まれつきの能力なんて些細なものだ。それにくらべたら、自らの意思で何かをはじめようと立ち上がり、同じ事をつ

づけて身につけた力の何と偉大なことか。

校門にたどりついたとき、午後の授業がはじまっていた。真面目な生徒だったらもう体育館裏にはいないだろう。しかし入間君は真面目な生徒ではなかった。体育館裏に駆けこみ、靴のグリップ力を信じて急停止する。ズザー、と砂煙をあげて僕の体は止まった。入間君と、そして不良の先輩方が中腰状態でそこにいた。彼らは僕を見ると「おー」と声をあげた。

「これ、パンです……。僕の、ですけどね……。だけど、みなさん、に、わけて、あげても……」

息がみだれて声が出ない。焼きたてのパンをみんなでわけあって食べた。ぱりとした表面の食感と、熱を保った状態のしっとりした内側のもちもち感に、入間君と不良の先輩方は満足そうだった。僕は体育館の壁に寄りかかって地面にすわる。

「おい、これ」

入間君が五百円玉を僕にむかって投げってくる。放物線を描いて飛んできた銀色の硬貨をキャッチして、僕はすぐさま彼にむかって投げ返す。

「いらない、ありがとう、入間君」

授業が終わるまでそこにいた。焼きたてパンがすっかり胃の中に消えると、香ばしいにおいは消えて、かわりに体育館裏の地面のにおいがした。チャイムが鳴って、僕は立ち上がる。⑪二本の足をうごかして、教室へむかった。

【問1】

㉐㉑のカタカナは漢字に改め、漢字はひらがなで読みを記しなさい。

- ㉐ 半ば ㉑ セイゾウ ㉒ ホウソウ ㉓ ホケン ㉔ セイサン

【問2】

①「ともかく僕は購買にむかって走り出した」とありますが、このときの「僕」の様子を説明したものとして最も適当なものを、次の中から選び記号で答えなさい。

(イ) 人間の迫力に体が縮み上がっているものの、自分の普段の行動を変えなければと思い、勇気を振り絞って走っている。

(ロ) 自分が人間に目をつけられる理由は理解できるとはいえ、あまりにも唐突な申しつけに、少しでも頭が混乱している。

(ハ) 人間からの命令をいったん受け入れたものの、どこか納得できない思いがあり、不満を抱えつつ購買に向かっている。

(ニ) なぜ自分が人間に命じられたのだろうと思いつつも、時間を守らなくてはならないという気持ちの方が先立っている。

(ホ) 一方的な命令に従ってはいけなそうと思いつつ、人間の強い口調に気圧されて、気づいたときには足が動き出している。

【問3】

——②「教室で息を殺すようにしながら暮らしている」とありますが、なぜですか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- (イ) 勝手に振る舞う人がいると学校の秩序ちつじょが乱れてしまう、と考えているから。
- (ロ) どうせ自分の意見なんて周囲は真剣しんけんに聞いてくれない、と考えているから。
- (ハ) たいした取り柄ともない自分になるべく目立ちたくない、と考えているから。
- (ニ) 誰もが周囲を気にして意見が言えない状況じょうきを不健全だ、と考えているから。
- (ホ) 人と異なる行動をすると不良に目を付けられてしまう、と考えているから。

【問4】

——③「ねめつけるような視線がむけられた」とありますが、どういうことですか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- (イ) まとわりつくような粘ねばっこい視線が「僕」にむいた、ということ。
- (ロ) にらみつけるような厳しい視線が「僕」に集まった、ということ。
- (ハ) 抑おさえつけるような重苦しい視線が「僕」に注がれた、ということ。
- (ニ) 食くらいつくような必死な視線に「僕」がとまどった、ということ。
- (ホ) かぶりつくような好奇こうきの視線に「僕」がさらされた、ということ。

【問5】

④「悔^{くや}しいとはおもわなかった」とありますが、なぜですか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- (イ) 屈辱^{くつじよく}であるはずのバシリという行為^{こうい}を、自分の役割として受け入れたから。
- (ロ) 学生時代にバシリの経験^{けんけん}をすることは、今後の人生において役に立つから。
- (ハ) バシリの役割^{やくわく}を精一杯^{せいいつぱい}とめることで、不良仲間の一員^{しゅうかく}に昇格^{しょうかく}できるから。
- (ニ) バシリに打ち込む^{うちこむ}ことで、退屈^{たいくつ}な学校生活を変えられるかもしれないから。
- (ホ) 他人のために行動するというバシリの役目は、自分の性に合っていたから。

【問6】

A

く

C

に当てはまる語の組み合わせとして最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- | | | | |
|-----|------|----------------------|----------------------|
| (イ) | A―意向 | B―要求 | C―同様 |
| (ロ) | A―推測 | B―代替 ^{だいたい} | C―交換 ^{こうかん} |
| (ハ) | A―圧力 | B―判断 | C―互角 ^{こかく} |
| (ニ) | A―想像 | B―換算 ^{かんさん} | C―対等 |
| (ホ) | A―打算 | B―選択 ^{せんたく} | C―相殺 ^{そうさい} |

【問7】

⑤「しかし僕の胸に、ふつつつと闘志がわき上がる」とありますが、これに関する次の説明文の a

d に該当する語を後より選び、記号で答えなさい。

人間のパシリとなった「僕」は、その侮蔑的とも言える扱いをされる中、奇妙な a 感を覚え始める。「僕」は、自分の b 意義を証明するかのように人間の好みのパンを執拗に調査し、そんな自分を気味悪がつて追い払おうとする人間に対しては、必死に食い下がる態度すら見せるようになる。

はたして「僕」は、「焼きたてのパン」を購入するという難題を突きつけられるのだが、「僕」はかえってそのことに「闘志」を燃やすことになる。つまり、パシリとしての「僕」の中に生じた c 意識が、これまでなかった d 性を「僕」に与えているのだ。

- | | | | | | | | | | |
|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|
| (イ) | 攻撃 | (ロ) | 安堵 | (ハ) | 目的 | (ニ) | 存在 | (ホ) | 疎外 |
| (ヘ) | 受動 | (ト) | 能動 | (チ) | 使命 | (リ) | 排他 | (ヌ) | 安定 |

【問8】

——⑥「人生というものはわからない」とありますが、「僕」はなぜそう思ったのですか。次の中から最も適当なものを
を選び、記号で答えなさい。

- (イ) 小中学校時代の「僕」は、自分の可能性に気づきながらもどこか目を背けていたから。
- (ロ) 小中学校時代の「僕」は、周囲の人に見下されていることに気づいていなかったから。
- (ハ) 小中学校時代の「僕」は、他人のことなどみんな気にかけていないと思っていたから。
- (ニ) 小中学校時代の「僕」は、劣^{おと}った人物という印象を払^{ふっしょく}拭するのをあきらめていたから。
- (ホ) 小中学校時代の「僕」は、人から馬鹿にされることを運命として受け入れていたから。

【問9】

D

く

G

に当てはまる言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|------|-----|-------|
| (イ) | たとえ | (ロ) | もしも | (ハ) | なおさら | (ニ) | かならずや |
| (ホ) | ついに | (ヘ) | むしろ | (ト) | それでも | (チ) | ともすれば |

【問10】

—— ⑦「彼^{かれ}にとつてのうしなわれた光景を、今は僕^{ぼく}が見ているのかもしれない」とありますが、このときの「僕」の様子を説明したものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

(イ) 「僕」は、人間のためにジョギングを続けることが、陸上競技をあきらめざるをえなかった人間の雪辱^{せつじよく}を果たすことにもつながると信じている。

(ロ) 入間から使いつつ走りを申しつけられた「僕」は、怪我^{けが}で陸上部を辞^やめてしまった入間から、かつて彼が抱^{いだ}いた夢を託^{たく}されたのだと自覚している。

(ハ) 「僕」は、自分の走っているジョギングコースは、陸上競技に打ち込^こんでいた入間がトレーニングのために走っていた道ではないのかと考えている。

(ニ) いち早くパンを届けることを目指す「僕」は、目標のために走り込^こんでいるという点で、陸上競技に励^{はげ}んでいたかつての入間と重なると思っている。

(ホ) 日々の鍛錬^{たんれん}によって走るのが速くなった「僕」は、怪我^{けが}をして陸上競技を挫折^{ざせつ}してしまった入間と比べても、遜^{そん}色^{しよく}のない走りをしている自信がある。

【問11】

—— ⑧「やがてあきらめたように担任教師はため息をついて僕は解放される」とありますが、このときの「担任教師」の様子を説明したものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

(イ) 「僕」がパシリをしているのか見当もつかなかったが、これ以上「僕」を追及^{ついききやう}するべきではないと判断した。

(ロ) 胸中を明かそうとしない「僕」にいらだちながらも、それを悟^{さと}られないように「僕」との話を切り上げた。

(ハ) パシリの内実を明らかにしない「僕」に戸惑^{とまど}いながらも、落ち着かせるように「僕」との話を終わらせた。

(ニ) パシ리를嫌^{いや}がっているという「僕」の思いを引き出したがったが、仕方なく「僕」への聴取^{ちやうしゆ}を打ち切った。

(ホ) 本当のことが言えない「僕」にあきれ果ててしまつて、「僕」からパシリの話を聞き出すことを断念した。

【問12】

—— ⑨「何日か平穩な昼休みを過ごした後、辛抱できなくなつて体育館裏へむかつた」とありますが、このときの「僕」の様子を説明したものとして最も適當なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

(イ) 「僕」は落ち着いた毎日を送る反面、どこか空虚さを抱えており、緊張感がありつつも充実していたパシリの日々に未練を残している。

(ロ) 「僕」は自由に毎日を過ごしている一方、本当にパシリをしなくていいのか不安に思っており、入間の気持ちを確認しようとしている。

(ハ) 「僕」は安心した生活を送っているながらも、入間を注視する教師の目が気になっており、ことあるごとに入間の言動をうかがっている。

(ニ) 「僕」の学校生活は静かなものに戻つたけれど、これまでの刺激も失われてしまったので、また不良たちとの親交を深めたがつている。

(ホ) 「僕」の毎日はすっかり弛緩したものになったが、パンを届ける以外の目標が見つかったため、気持ちを新たに学校生活を送っている。

【問13】

—— ⑩「脳が命令を発するまでもなく、まるで足が自由意志を持ったように」とありますが、このときの「僕」の様子を表す語の組み合わせとして最も適當なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

(イ) 茫然・狼狽 (ロ) 友情・信頼 (ハ) 義務・責任

(ニ) 忘我・歓喜 (ホ) 本能・理性

【問14】

—— ⑪「二本の足をうごかして、教室へむかった」とありますが、これに関する次の説明文の(1)～(4)について、適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

以前は教室の隅^{すみ}つこで過ごしていた「僕^{ぼく}」だが、入間からパシリに指名されたことがきっかけで変化^{おとろ}が訪^やれる。「うつむいて」ばかりで、ほとんどの時間を教室で過ごしていただろう「僕」は、

- (1) (イ) 入間の要求に応えながら、人の役に立つことの大切さに気づくようになる
(ロ) 購買^{こうばい}まで走る日々を通じて、継続^{けいぞく}が自分の力を向上させることを実感する
(ハ) 苦手だった不良仲間と交流をすることで、堂々^{どうどう}とした態度に変わっていく

そんな「僕」が、パシリという経験の中で感じたことは、「自らの意思」で行動することの大切さである。

「僕」のパシリとしての生活は、教師の介入^{かいにゅう}というかたちでいったんは終わりを迎えた。しかし「僕」はトレーニングを重ねた身体に導かれるかのように、パンを買いに行くことになる。「僕」は、

- (2) (ニ) パシリとしての意思を固くするために走り出す
(ホ) 強い意思とともにパシリという行為^{こうゐ}を選び直す
(ヘ) 自らの意思を確認^{かくにん}するために再びパシリとなる

のだった。

入間から投げられた五百円玉を「僕」が「すぐさま彼^{かれ}にむかって投げ返す」という場面からは、「僕」のそのような様子を見て取ることができる。つまり、「僕」はこのとき、

- (3) (ト) パシリを受け入れていた自分から脱却^{だつぎやく}したのだ
(チ) パシリをしていた過去をついに克服^{こくふく}できたのだ
(リ) パシリという行為を経て主体性^{かくてい}を獲得したのだ

。

人間の求めるパンを購入するという目的に支えられた「僕」の生活は、それまでの色褪せた光景をゆたかなものにする。自らの意志で「二本の足をうごかして、教室へむかった」「僕」が見る教室の光景は、「うつむいて過ごしていた」ときとは異なるものだったに違いない。このように考えると、本作は、

(4)

- (ヌ) パシリの経験を通して「僕」の成長を描いた物語
- (ル) 「僕」の変化を通してパシリを批判的に描いた物語
- (ヲ) 「僕」のパシリの日々を喪失感とともに描いた物語

とすることができると言える。

II

次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

一九六三年（昭和三十八年）に乗鞍岳^{のりくらだけ}に上って行く自動車道路が作られた。いうまでもなく「観光施設^{しせつ}」として「開発」されたのである。かつての「山」は恐れ^{おそ}を以て仰^{あお}がれ、敬意を以て尊ばれる存在であった。近づくことの困難、その中に生ずる様々な不測の事態、そして水源地として、又材木や燃料や木の子の宝庫として私たちの生存を保証してくれることの有難さ^{ありがた}。墓場であり他界であると同時に社会^{さと}の保護者であり発生の源泉でもある、その両義性の持つ不思議さは私たちの①畏敬^{いけい}の念を駆^かり立てずには措^おかなかつた。

しかし、その「山」——しかも「山」の中の「山」としての「岳（タケ）」すらもが一個の「施設」と化したのである。しかも安全で「楽しい遊園地」の延長物へと変質したのであった。②「山」の歴史はかくて終わった。そして「山の前史」の終焉^{しゅうえん}は、山を経験の相手として持つことによって形造られてきた私たち人間の感覚の世界に構造的な終焉をもたらしている。そのことの一つの現れが、厳しい存在に対する感受性の欠落であり、さらに正確に言えば厳しさと優しさの両義的共在に対する感得能力の全き消滅である。優しさはひたすら優しいだけの微温性^{びおん}の中にしか発見されず、厳しさは唯々機械的秩序^{ききよく}に基づく強権的命令の中にしか見つけることが出来ない。——という感受性の単元化が、今、史上初めて全般的な規模で発生している。③外界と他者に対する受容器が根本的な損傷を蒙^{こうむ}ったのである。そのことを証明する証拠^{しやうこ}が欲しいならば、先ず自らを省みよ。自らの生活様式の実態を省察せよ。そうしてその営みの延長線上に発生する世界への新たな認識^{にんしき}こそが、感受性の構造的回復をもたらす第一歩に他ならないであろう。何故^{なぜ}か。次に示す小さな一例を見られたい。

一九六三年の乗鞍岳自動車道路の「開発」は当然のことながら多くの生物を犠牲にした。その犠牲の一つに「ハイマツ」と呼ばれる高山地帯固有の松の木があった。岩山の固い瘠せ地^{やせ}に根づいて岩面を「這う^は」ように生きている、その木の姿が「ハイマツ」とい

う名前の由縁であつたが（その木のその名前を「這松」と書いたのは元文元年坂本天山が著した「駒ヶ岳一覽之記」であつた）、その生きる姿勢が示しているものは、厳しく過酷な条件と、その条件に貫かれながら屈服するのではなくて粘り強く成長していく、その木の生き方であつた。細い枝は柔らかに密に混み合つて四方に低く低く拡がっているが、その典型的な「低木」の形と質はどこから来たのか。観光客には分らないであろうし、己れの欲求の充足しか考えない自我主義者にも分らないであろうが、注意をそこに、（他者の生存条件に）集中することの出来る者ならば、容易に見て取れることは、斜面を匍う低いその形が高山の強い風圧と冬期の厚い積雪の加重という外的条件への抵抗を秘めた対応である。その証拠に風の当たらない所のものには「立つもの」もある、とさえいう。そうして枝の柔かさは風圧と積雪の二重の圧力を吸収し飲み込みながら④「従いつつ逆らう」生き方を保証するものであつた。しかしその生き方は絶えざる逆境を内蔵しているが故に、順調な環境の中で我儘一杯に育つた者とは違つて、肥え太ることも出来ないし、高く聳え立つことも出来はしない。幹すらもが細く、しかし、しっかりとしている。どのようにであるか。その点を精密に調査し観察した人がいる。樹齡と幹の直径と年輪幅とを計測したのである。しかしその計測はその木を伐採することによつてなされたのではない。自動車道の開発の犠牲とされたその木を一本一本集めてその悲惨な屍体の解剖として行われたのである。⑤それは一つの葬いであつた。

信濃教育会に属する名取陽、松田行雄の両氏の丁寧な調査によると、標高二五五〇メートル地点で犠牲にされた九十五本のハイマツの平均樹齡は驚くなけれ一〇九年、そしてその平均直径は七・九八センチメートル、一年毎の成長を示す年輪幅の平均は〇・三七ミリメートルであつた。一年に一ミリの $\frac{1}{3}$ 強ずつ一〇九年間成長し続けたのであつた。標高二六五〇メートル地点でも九十八本のハイマツが殺害されていた。その平均樹齡は一一〇年、その平均直径は五・六八センチ、一年ごとの平均年輪幅は〇・二六ミリであつた。標高二七五〇メートル地点での六十一本のハイマツは、平均樹齡七七年、平均直径五・六二センチ、平均年輪幅〇・三七ミリであつた。

この計測結果が物語っているその木の生き方は私たちの胸を衝くものがある。少なくとも私にはそうである。何という遅々たる歩

み、そして何という粘り強さ、百年にもわたって決して歩みを停めないその歩みの力強さ、比喩ではなくて文字通りの「A

「辛苦を重ねて生き続けて来たその精進の厳しき、そしてその柔軟な我慢強さ。外面的に高く聳え立つものでないだけに一層、⑥それらの「隠された次元」における実質的特徴は気高い品位をもつて私たちの前に立ち現れる。

いうまでもなく一九六三年の乗鞍岳開発は高度成長の所産であった。それが含む経済学的含意は、「第三次産業」の国境の飛躍的な拡張であり、それに伴う土木産業と土木機械業の新たな急成長であり、「行楽人口」と「行楽距離」の増大がもたらす消費活動の急膨張であり、それによるGNPの上昇であり、自動車販売市場の急速な拡大であり、それらを引金とする「産業連関表」全体のスケールの巨大化であった。⑦そのことは極めて見易い。しかし人々が一斉に「便宜」を求めてその異常な膨張過程に「参加」したことは見過ごされ易い反面である。僅か一時の「享楽」を求めて、しかも労苦のコストを払うことのない一面的な（すなわち一義的な）享楽だけを求めて「乗鞍岳」に殺到する人々の群れに較べる時、その群れの通り過ぎる傍らに人知れず横たわっていた「ハイマツ」の実態は、厳しさと軟らかさと、辛苦と素直さと、遅々たる速度と長年の持続と、といった一文の両義性を典型的に内蔵するものであった。

こうして、⑧人間の浅薄な「頭の良さ」がどんなものであるかが決定的な形で明らかにされた。岩山の斜面を百年にわたって匍い続けて来た一つの樹木の生活様式とのコントラストにおいて。そうしてその対称軸となったハイマツの実態を認識のレベルにまで高めたものは、人間の自己中心的な開発がもたらした「破壊」という危機の最中において、その犠牲をつぶさに見取るという、数少い人の丹念な行為に他ならなかった。危機は認識のチャンスであり、その危機における認識を支える精神的動機は犠牲者への愛であり、そうしてその認識行為だけが「浅ましい人間」からの脱出と回復を——すなわち蘇りと再生を可能にする第一歩に他ならないということ、これ程如実に示す一例はそう多くはない。私も又その道を、残された僅かの年月の間、歩もうとする者の一人でありたい。此の土壇場の危機の時代においては犠牲への鎮魂歌は自らの耳に快適な歌としてではなく精魂込めた「他者の認識」として現れ

なければならない。^⑨その認識としてのレクイエムのみが辛うじて蘇生への鍵を包蔵している、というべきであろう。

【問1】

―― ①「畏敬の念」とありますが、以下の文の a c のそれぞれに該当する語を本文中より2文字で抜き出しなさい。

「畏敬の念」とは、ある対象に a を抱くと同時に、深い b を払うという、 c 的な思いを指す。

【問2】

―― ②『山』の歴史はかくて終わった」とありますが、どういうことですか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- (イ) 多様な面を持つはずの山の性格が、観光のための場所とのみとらえられるようになってしまった、ということ。
- (ロ) 人間が安易に近づくことを拒んできた険しい自然が、ついにその人間の手によって切り拓かれた、ということ。
- (ハ) 開発により貴重な自然を失った山は、もはや命の恵みをもたらすことができなくなってしまった、ということ。
- (ニ) 誰もあらがうことができない時代状況の変化によって、山の果たす役割も徐々に変わっていった、ということ。
- (ホ) 厳しくも豊かな山の自然と共に歩んできた伝統的社会が、今や存亡の危機に瀕してしまっている、ということ。

【問3】

——③「外界と他者に対する受容器が根本的な損傷を蒙ったのである」とありますが、どういうことですか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- (イ) 外の世界に興味を示さずに、自分の殻に閉じこもってしまっている、ということ。
- (ロ) 自分とは考えの異なる意見を、受け入れにくくなってしまっている、ということ。
- (ハ) 他人との関わりにおいて、過度に傷つきやすくなってしまっている、ということ。
- (ニ) 物事をとらえる感覚が、きわめて単純なものとなってしまうている、ということ。
- (ホ) 周囲から得られる情報に、向き合おうとしなくなってしまうている、ということ。

【問4】

——④『従いつつ逆らう』生き方』とありますが、これとほぼ同じ意味を表している部分を、同じ段落の中から8文字で抜き出さない。

【問5】

——⑤「それは一つの葬いであった」とありますが、どういうことですか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- (イ) 今まで知られていなかったハイマツの生態を明らかにしたことは、伐採された木を人間の生活の中に活かすことにつながった、ということ。
- (ロ) 厳しい環境に耐え抜くハイマツの特徴を明らかにすることで、木を伐採する必要はなかったのではないかと疑問を投げかけた、ということ。
- (ハ) 丈夫であったハイマツも道路開発の結果切り倒されてしまい、その木の生育の仕方を調べることはできなくなってしまった、ということ。

【問6】

(二) 調査のためとはいえども伐採された木をまたさらに切り刻むことは、必死で生きてきたハイマツに対し心が痛む行為であつた、ということ。

(ホ) 開発のため切り倒された木を詳細に調べることが、ハイマツの生のあり方とその死の意味を深く考えることにながつていた、ということ。

A にあてはまる語句として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

(イ) 汗水を流す

(ロ) 雪崩を打つ

(ハ) 風雪に耐える

(ニ) 肩で風を切る

(ホ) 血の雨が降る

【問7】

——⑥「それらの『隠された次元』における実質的特徴は気高い品位をもつて私たちの前に立ち現れる」とありますが、これに対する説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

(イ) 外敵からその身を守るため、苦難に耐え続けるハイマツに、先人たちが積み重ねてきた努力と同様の価値を筆者は見出している。

(ロ) その外観からは知ることが難しい、厳しい環境を耐え抜くハイマツの生き方に、人間の尺度を超えた崇高さを筆者は感じている。

(ハ) ひるむことなく困難に向かっていたハイマツの姿を、もう目にすることはできないという事実の意味について筆者は問うている。

(ニ) 長い年月をかけて一歩ずつ成長してきたハイマツを、瞬時に切り落としてしまったことの理不尽さについて筆者は主張している。

(ホ) 粘り強いハイマツの生育を知ることができたのは、伐採されたことによって調査が可能となった結果であると筆者は認めている。

【問8】

——⑦「そのことは極めて見易い」とありますが、どういうことですか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

(イ) 経済が急成長を遂げたことにより、人々の生活に余裕が生まれたのは否定しがたい事実だ、ということ。

(ロ) あまりにも急速に人々の行動に変化が起ったことよって、環境破壊も一気に進化した、ということ。

(ハ) 高度成長が社会の変化をもたらしたことは、種々の調査やデータによって証明されている、ということ。

(ニ) 自動車普及率が急上昇したことは、自然を切り拓く道路開発の必要性の増大をもたらした、ということ。

(ホ) 数字だけで示される経済指標の伸長しんちようを手放しで喜ぶことは、あまりにも安易な態度である、ということ。

【問9】——⑧「人間の浅薄せんぱくな『頭の良さ』がどんなものであるか」とありますが、どういうことですか。次の中から最も適当

なものを選び、記号で答えなさい。

(イ) 時代の流れにしたがって人々はほとんど同じ考え方をするようになっていくだけではなく、違う方向を目指す人やその態度を許容できなくなってしまうている、ということ。

(ロ) 人間は次々と道具や機械を発明して、日常生活の利便性を大幅おおはばに増大させてきたが、その結果として自分たちが築いてきた伝統や文化を否定することになった、ということ。

(ハ) 人類は進化の過程で様々な技術を発達させてきたが、その技術発展の背後に多くの人々の計り知れない犠牲ぎせいがあったという事実をすっかり忘れてしまっている、ということ。

(ニ) より便利な環境を作ることを目指して、多くの人々が競い合うように努力しているが、どれだけ早くその目的を達成できるかということにとらわれがちである、ということ。

(ホ) 多くの人々が自分たちの求める快適さを実現しようとするあまり、何の疑いも持つことなく、様々な物事とのかかわりを振りかえることすらなくなっている、ということ。

【問10】

⑨「その認識としてのレクイエムのみが辛うじて蘇生への鍵を包蔵している、というべきであろう」とありますが、これに関する次の説明文の a ～ h に当てはまる語句を、後からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

一九六〇年代のいわゆる高度経済成長の時代に生活が変化していく中で、人々は a ばかり追い求めるようになってしまった、と筆者は言います。自動車道路が作られ、乗鞍岳が b として開発されたことは、当時の象徴的な出来事でした。しかし、その道路開発の結果として切り倒されたハイマツの生態こそ、人間の c を照らし出すものであったと、筆者は主張します。しかも、d の中を生きるハイマツの特徴を明らかにしたのは、無残にも切り落とされた木を決して無駄にはせず、e 人々の努力の結果でした。

このような行為に筆者は、人間性が損なわれつつある現在の f を見出しています。開発によって破壊され消えていく自然や生物は、どのようにして生きてきたのか、またなぜ不要なものとして捨て去られなければならないかなかったのか。g を抱き様々な角度から検証することこそが、欲望を充足させようとし続ける人間のありようを見つめなおす行為となるのです。

人間中心の開発がもたらした被害を丹念に見て取り、私たちの生き方を考えていくこと。そのような「認識」をおこなっていくことを筆者は h と呼んでいるのであり、人間性の回復という困難な道には欠かせないものなのです。

- (イ) 厳しく過酷な条件
- (ロ) 綿密な調査と観察

- (ハ) 犠牲ぎせいに向けた鎮魂歌ちんこんか
- (ニ) 理想と現実との矛盾むじゆん
- (ホ) 楽しく安全な観光地
- (ヘ) 失われていくものへの愛情
- (ト) 歩みを止めない進化の力強さ
- (チ) 危機的状況じきじょうきょうからの再生への筋道
- (リ) 一時の享楽きやうらくを求める浅ましいあり方
- (ヌ) 便利さや快適さといった表面的なもの

【出典】

I

中田永一「パン、買ってこい」「走る？」文春文庫、二〇一七、一一～二五ページ

II

藤田省三「松に聞け」(『戦後精神の経験Ⅰ——藤田省三小論集』影書房、一九九六年、一～八ページ)

